多羅葉（たらよう）

多摩市　和久井博（幸町出身）

「多羅葉」と聞いて何のことかすぐにわかる人はかなりの教養人ですね。

かなり前になりますが、Jネットの大田会長の事務所で、見せていただいた高級クラブのコースターに「多羅葉」と店の名前が印刷されていました。会長のネーミングによるそのお店はその後ママさんが結婚されて、今は営業していないとのことですが、恥ずかしながら、私はそのときに初めて多羅葉という名前を知りました。

日本の近代郵便制度の創設者、前島密翁が郵便制度調査のため渡英したのは一八七〇年（明治三年）だから、今から百三十年以上も前のことですね。そういえば先日、高田高校の創立百三十周年記念式典がありましたから、同じ頃なのですね。

この多羅葉という名前の樹は上越市の池部にある前島密記念館の前に植えられています。

榊原神社の向かいにある高田郵便局にもありますし、東京駅の丸の内にある東京中央局にも植えられています。

そうです。多羅葉は「郵便局の木」なのです。平成九年四月に当時の郵政省により多羅葉は「郵便の木」に指定されました。

この多羅葉の葉は椿の葉を大きくした様な形をしており、葉の裏を細い棒でひっかくと変色して浮き上がり、文字を書くことが出来るのです。そのため、「葉書の木」ともいわれています。多羅葉の葉に文字を書くことは我が国では、今から五百年ほど前の戦国時代に武士が便りに利用したとも言われています。また、そのとき、乾燥を防ぐため竹筒に水と一緒に封じ込み運んだようです。「葉書」や「封筒」の語源もここから来たものかも知れませんね。

ハガキの語源は、昔は一枚の紙に書かれた命令書などを「端書」と呼んでいたものがハガキになったという説もありますが…。

紙以前の書写材料をみると、チグリス・ユーフラテス川で起こったメソポタミア文明は粘土板に楔形文字を使っています。

ナイル川のエジプト文明は石材、パピルスを使い象形文字を書いています。パピルスと呼ばれる葦に似た植物は今日の紙に最も近いことから、Paperの語源にもなっています。

インダス川のインダス文明は石材でインダス文字を使っていますし、黄河の黄河文明は甲骨、竹簡、木簡に甲骨文字を書いています。

色々な文化や背景が感じられて面白いですね。

木の葉が使われていたのは、古代インドで写経をする際に使っていた貝多羅葉（ばいたらよう＝梵語）というヤシ科のオウギヤシで、その掌状の葉の裏に竹筆や鉄筆で経文を書いていました。

多羅葉はモチノキ科の常緑樹ですが貝

高田郵便局の多羅葉の樹

多羅葉の説明

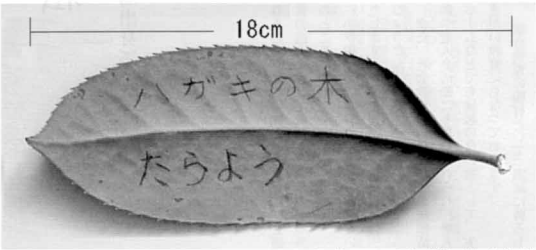
多羅葉と同様にその葉に傷痕を付けると黒変して文字が書けるので、わが国では貝多羅葉になぞらえて「多羅葉」と名付けられました。

この多羅葉はモンツバキシバ、ノコギリシバが本来の名前ですが、俗に、「ジカキシバ」「エカキシバ」「ハガキの木」とも呼ばれています。

多羅葉の葉は長さ十八センチ、幅八センチ程度ですが、この葉に宛名と便りを書いて切手を貼り、ポストへ入れると現在でも郵便物として扱ってもらえます。

多羅葉樹は十一月になると直系八ミリ程の赤色の実が熟しますが、大好物の鳥達に冬の間にほとんど食べつくされてしまいます。多羅葉の樹皮からは鳥モチがとれますし、葉は健康茶として腎臓病予防に良いと愛飲されている方もおられるようです。

多羅葉の葉



http://www.tcp-ip.or.jp/~jswc3242/mame57hagakinoki.html

東京中央局（丸の内）の多羅葉の樹